様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２５１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２９１

研究課題名（和文）ザクセン選帝侯アウグスト二世旧蔵日本磁器の研究―西洋における日本像の受容史的考察

研究課題名（英文）Research on Japanese Porcelain Collection of Augustus II the Strong, Elector of Sachsen : Reception history of Japan Images in the West

研究代表者
櫻庭　美咲（Sakuraba, Miki）

神田外語大学・日本研究所・講師

研究者番号：２０４２５１５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アウグスト二世（通称アウグスト強王）が、「日本宮」のために収集した大規模な陶磁コレクション（ドレスデン国立美術館磁器コレクション館所蔵）の悉皆調査を軸に、研究を進めた。同コレクションの総目録編纂にむけた大規模な国際共同プロジェクトへの参加を通じ、日本磁器約800点を熟覧して得た結果をデータベース化し、総目録の英文作品解説約440点分を完成、文様の図像研究にも知見を得ることができた。これらは総目録の一部として公開予定である。受容史的な観点からみた「日本宮」における日本表象の変遷についても、建築図面等の文献研究・磁器作品研究の両面から確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アウグスト強王コレクションは、約8千点という規模を誇る。18 世紀作成の所蔵品目録が現存するという史料的価値に裏打ちされた明確な伝来に加え、強王の没年により入手時期の下限を1733年に限定しうる点からも評価に値する。かような基準資料としての価値をともなう大規模な陶磁コレクションは、世界的に見て比類がない。それゆえ、所蔵品目録の全ての磁器の記録を実物の磁器と照合し、網羅的に収録した総目録を作成し英文で公開することは、至大な意義をもつ。本研究の成果を国際的に共有することは、日本側での肥前磁器の生産窯研究の基準資料の増加にもつながり、国内外双方の学術的進展が期待される。

研究成果の概要（英文）：We investigated the vast oriental ceramics collection of Augustus II the Strong, Elector of Sachsen for the Japanisches Palais (currently the collection of the Staatliche Kunstsammlungen Dresden, Porzellansammlung). Thanks to our international research project, we could complete an original survey of the collection comprising 800 Japanese Porcelains with a detail description in English for 440 pieces. We also conducted research about the iconography of undetermined motifs. These results will be published on-line as a part of the Collection Catalogue. We also confirmed the shift in perception of Japan Images at the Japanisches Palace through changes in documents related to the architectural planning and the porcelain collection.

研究分野：美術史

キーワード：日本美術史　文化交流史　工芸史　考古学　ドイツ美術　西洋美術史　美学　東西交流史

１．研究開始当初の背景

ドイツのザクセン選帝侯兼ポーランド王アウグスト二世（1670～1733・通称アウグスト強王）は、ヨーロッパ最大と謳われる膨大な日本・中国産の磁器コレクションを一代で築きあげた。これらの磁器は、強王が「日本宮」と名付けた東洋趣味の宮殿（ドレスデン）を装飾するために収集されたが、王の急逝（1733 年）により計画は未完に終わる。没年まで収集された約 2 万 5 千点の東洋磁器だけがのこされるが、その後多くが戦乱等を経て散逸、世界に流出した。

アウグスト強王が旧蔵した東洋磁器コレクションの総体をとらえ、広く一般に公開するための、アウグスト強王旧蔵東洋磁器コレクションの総目録編纂にむけた、大規模な国際共同研究プロジェクト（以下ドレスデンプロジェクトと略記）が、ザクセン王家のコレクションを管理するドレスデン国立美術館磁器コレクション館により、2012 年より進められている。同プロジェクトは、ドレスデン国立美術館磁器コレクション館（以下ドレスデン国立美術館と略記）館長の管理下に置かれ、学術および運営の統括にクリスチャン・ヨルフ（ライデン大学教授）があたる。総目録の執筆、そのための調査および関連する諸課題の研究は、世界各国の博物館（ドレスデン国立磁器美術館、アムステルダム国立博物館、英国王立コレクション、フリア美術館、北京故宮博物院、台湾故宮博物院等）で日本・中国陶磁を担当する学芸員や大学教員（ライデン大学、プラハ工芸大学等）などの専門家陣から成る国際的な研究チームが共同でおこなう。研究代表者の櫻庭は、ドレスデンプロジェクト開始期の準備のための協力を求められたことを契機に、磁器の原産国日本側からの貢献を果たしたいと考えた。日本側で任命された同プロジェクトのメンバーは、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、藤原友子（佐賀県立九州陶磁文化館）、西田宏子（根津美術館）と櫻庭であった。

２．研究の目的

本研究は、アウグスト強王が「日本宮」のために収集した日本磁器（17～18 世紀日本から西洋へ輸出された日本磁器は有田を中心とする肥前産であり、肥前磁器もしくは伊万里焼と呼ばれる）の悉皆調査に基づいて研究を推進する。強王旧蔵の日本磁器に関する歴史的位置づけについては、大橋が、生産地側の考古学の成果に基づき、科学的な裏付けを重視した、実証的なデータ分析を行う。こうした作品研究、およびドレスデン側の史料を用いる文献研究に基づき、「日本宮」の室内装飾における日本磁器の位置づけといった、受容史的な観点により、ザクセン宮廷で育まれた日本認識の把握も試みる。並行して、ドレスデンプロジェクトによるコレクション総目録編纂プロジェクトの共同執筆者として、総目録の作品解説の執筆に協力する。

ただし、膨大な資料の調査を本科研の限られた予算と期間で全て完了し、公開することは不可能である。また、総目録に収録される研究は、ドレスデンプロジェクト全体のデータの編集が完了するまで非公開である（2021 年公開予定）。そのため、上記の調査や総目録の解説執筆を進めつつ、本科研の実施期間内に達成する最終的な研究課題は、日本磁器が西洋宮廷の美術として受容されたという事実に則した、美術史的な問題解決と位置づけた。方法論や文化的背景を異にする研究者同士が情報を交換しあい、総合的な知見に到達することを目指している。

３．研究の方法

本研究は、海外に所在する膨大な数のコレクションの悉皆調査を基礎とするものである。調査内容や利用できる資料の条件は、ドレスデンプロジェクトの判断により整備される。進行状況に応じ条件の変更が生じる可能性も予期される。そのため、実現性に支障がないと思われる範囲に課題をしぼり、調査や研究を進める計画とした。

Ｉ　アウグスト強王旧蔵コレクションにおける日本磁器の調査・研究

（１）ドレスデン国立磁器美術館所蔵日本磁器の共同調査

（２）日本国内に所在するアウグスト強王旧蔵日本磁器の調査

Ⅱ　考古学的方法による資料の位置づけ

Ⅲ　強王旧蔵品の日本磁器における日本の伝統意匠の把握

Ⅳ　ドレスデン宮廷における日本磁器への評価・認識

Ⅴ　強王旧蔵東洋磁器コレクションの総目録編纂事業への協力

上記Ⅰ～Ⅳをふまえ総目録の英文の作品解説を執筆する

４．研究成果

Ⅰ　アウグスト強王旧蔵コレクションにおける日本磁器の調査・研究

（１）ドレスデン国立磁器美術館所蔵アウグスト強王旧蔵コレクションの日本磁器を対象に、４回の共同調査を実施した。櫻庭および大橋康二を中心に、荒川正明、野上建紀、西田宏子、藤原友子の計 6 名が、肥前磁器（総数約 1250 点）を対象とする調査に参加し、合計約 800 点の熟覧調査が完了した。積み残した 450 点については、今後調査を継続予定である。

（２）日本所在のアウグスト強王旧蔵コレクションに関する所在調査をコーディネートし、国内にも 12 点の所在を確認した（総目録を通じ 2021 年に公開予定）。

Ⅱ　考古学的方法による資料の位置づけ

上記合同調査で熟覧した、約 800 点の磁器資料の歴史的位置づけ（産地・年代）を、大橋が分析し、データベース化した。それを櫻庭が英訳してドレスデンプロジェクトに提出した。データベースは相互間で共有しつつ、大橋が情報の追加を継続している（総目録を通じ 2021 年に公開予定）。

Ⅲ　強王旧蔵品の日本磁器における日本の伝統意匠の把握

執筆担当の各メンバーは、伝統意匠に関する知見をそれぞれの作品解説に反映させた。櫻庭は、アウグスト強王旧蔵コレクションに表された主題に関する知見の一部を、後述のドレスデンプロジェクトの国際ワークショップで口頭発表した（双方とも総目録を通じ 2021 年に公開予定）。

Ⅳ　ドレスデン宮廷における日本磁器への評価・認識

櫻庭は、「日本宮」に関わる建築図面や東洋磁器の所蔵目録などのドイツ語文献と磁器の調査結果を照合し、「日本宮」における日本表象について、以下の通り考察した。成果は論文「神聖ローマ帝国諸侯の磁器陳列室にみる政治性と日本の表象―ブランデンブルク＝プロイセンおよびザクセンの事例を中心に―」（『中近世陶磁器の考古学』第 10 巻、著者：佐々木達夫,山本文子,長佐古真也,櫻庭美咲,坂井隆ほか、雄山閣，2019 年、pp．253-379.）により公表した。

1730 年以前まで、「日本宮」において「日本磁器」と称され、日本の事物として表象されたことが読み取れる対象は、有田産と景徳鎮産、双方の金襴手様式のデザインであった。当時は、「日本磁器」と称された金襴手様式磁器こそが、「日本宮」の日本イメージの源泉であった。「日本宮」の「日本」という名は、金襴手様式のデザインに由来すると考えられる。しかし 1730 年以降、城のコンセプトは抜本的に見直され、マイセン磁器を頂点とする方針となった。そこでは柿右衛門様式磁器を中心とする日本磁器が、マイセン磁器をひき立て、その名声を裏付ける指標としての、ネガティブな表象機能を担っていた。「日本宮」における日本磁器への評価、および磁器にもとづく日本表象には変遷があり、重層性と両極性ともいうべき玉虫色の性格が浮き彫りとなった。

Ⅴ　強王旧蔵東洋磁器コレクションの総目録編纂事業への協力

（１）総目録の作品解説（英文）は、約 440 点分を完成させ、ドレスデンプロジェクトに提出

した。これらは現在編集中であり、総目録を通じて 2021 年に公開予定である。

（２）2018 年６月ドレスデン国立美術館主催で開催されたドレスデンプロジェクトのための国際学会“Porcelain circling the Globe International Trading Structures and the East Asia Collection of Augustus the Strong (1670-1733)”に協力し、櫻庭と藤原は英語の口頭発表(招待講演)を行った（学会は研究者向けに限定公開され、各国から約 350 名が参加。発表者は独・蘭・仏・英・米等国際的なメンバーにより構成された)。加えて、同時期同美術館主催で開催された国際ワークショップ“The Dresden Porcelain Project Workshop”にも参加し、西田、櫻庭と藤原がアウグスト強王旧蔵コレクションについて英語で口頭発表、大橋と荒川も口頭発表（通訳付）した。学会を通じて海外からの多数の研究者との交流をはかることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　11　件）

①野上建紀,エラディオ・テレロス・エスピノサ「アルゼンチン・チリに渡った東洋磁器」『多文化社会研究』(5),2019 年 3 月，pp．75-93.

②櫻庭美咲「陶磁器から考えるミュンヘンのシーボルト・コレクション」『シーボルト・コレクションから考える』国立歴史民俗博物館,2018 年，pp．77-87.

③荒川正明「古今の名陶に出会う(89)ウィーン郊外の古城に残された陶片」『茶道の研究』63 巻（5）,2018 年，pp．32-38.

④野上建紀「陶磁器からみる長崎と海外とモノ交流　肥前磁器と「唐人」,「唐船」のかかわりについて」『多文化社会研究』(4),2018 年,pp．141-156.

⑤大橋康二「肥前陶磁からみた近世社会」『考古学ジャーナル』715 巻　2018 年，pp．5-8.

⑥大橋康二「徳川将軍のための鍋島と欧州王侯が求めた柿右衛門 ： 歴史を映し出す焼物たち」『史友』 50 号（青山学院大学史学会　第三十七回 史学会大会特別講演会記録）,2018 年，pp．1-27.

⑦大橋康二「有田磁器としての The Birdcage Vase」『ドレスデン国立美術館陶磁器資料館所蔵の日本美術品共同研究事業報告書染付蒔絵鳥籠装飾広口大瓶―The Birdcage Vase―』東京文化財研究所 2017 年，pp．22-28.

⑧野上建紀,エラディオ・テレロス・エスピノサ「コロンビアに渡った東洋磁器」『多文化社会研究』(3),2017 年，pp．165-177.

⑨野上建紀,エラディオ・テレロス・エスピノサ「ペルーに渡った日本磁器」『横浜ユーラシア文化館紀要』2016 年，pp．1-17.

⑩大橋康二「中国染付磁器の始まりから発展と,有田磁器との関わり」『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館,2016 年，pp．2-31.

⑪大橋康二「発掘を通して見えてきた有田磁器の歴史」『有田焼百景』(株)ラピュータ,2016 年，pp．112-120.

〔学会発表〕（計　13　件）

①Miki SAKURABA,“The Chinese junk's intermediate trade in Japanese porcelain for the West between the late 17th century and 1730's”(国際学会“Porcelain circling the Globe International Trading Structures and the East Asia Collection of Augustus the Strong (1670-1733)” 於ドレスデン国立美術館,2018 年 6 月）（国際学会,招待講演）

②Tomoko FUJIWARA,“Early exported Arita wares in the collection of Augustus the Strong”(国際学会 “Porcelain circling the Globe International Trading Structures and the East Asia Collection of Augustus the Strong (1670-1733)” 於ドレスデン国立美術館,2018 年 6 月）（国際学会,招待講演）

③Koji OHASHI, Miki SAKURABA, Tomoko FUJIWARA, Filip SUCHOMEL, ”Japanese Imari porcelain”（国際ワークショップ“The Dresden Porcelain Project Workshop” 於ドレスデン国立美術館,2018 年 6 月,招待講演）（国際シンポジウム）

④Hiroko NISHIDA, “Stoneware from Kyoto and Osaka and other new discoveries”（国際ワークショップ“The Dresden Porcelain Project Workshop” 於ドレスデン国立美術館,2018 年 6 月）（国際学会,招待講演）

⑤Masaaki ARAKAWA, Christiaan JORG, “Chinese and Japanese Iron-Red and Gold Porcelain”（国際ワークショップ“The Dresden Porcelain Project Workshop” 於ドレスデン国立美術館,2018 年 6 月）（国際学会,招待講演）

⑥Koji OHASHI, “Assignment of Japanese porcelain in kiln sides via porcelain shards”（国際ワークショップ“The Dresden Porcelain Project Workshop” 於ドレスデン国立美術館,2018 年 6 月）（国際学会,招待講演）

⑦野上建紀「長崎から輸出されたチョコレートカップ」（長崎県考古学会大会「文明のクロスロード長崎」於長崎大学,2018 年）（招待講演）

⑧櫻庭美咲「磁器陳列室をめぐる神聖ローマ帝国諸侯の競合と日本磁器」（国立歴史民俗博物館・国立西洋美術館共催,歴博国際シンポジウム「異文化を伝えた人々―19 世紀在外日本コレクション研究の現在」於国立西洋美術館講堂,2017 年）（国際学会）

⑨櫻庭美咲「オラニエ＝ナッソウ家の磁器収集と陳列の諸相」（国際学術シンポジウム「17 世紀オランダ美術と〈アジア〉」於国立西洋美術館講堂,2017 年）（国際学会,招待講演）

⑩櫻庭美咲「陶磁器から考えるミュンヘンのシーボルト・コレクション」（歴博国際シンポジウム「シーボルト・コレクションから考える」於国立歴史民俗博物館,2016 年）（国際学会）

⑪大橋康二「色絵磁器の始まりの実態（初期色絵）―山辺田遺跡調査成果を中心に―」（東洋陶磁学会第 44 回大会,於佐賀県立九州陶磁文化館講堂,2016 年）

⑫野上建紀「肥前磁器の流通について―17 世紀前半の出土資料を中心に―」（東洋陶磁学会第 44 回大会,於佐賀県立九州陶磁文化館講堂,2016 年 10 月）

⑬野上建紀「陶磁器研究における沈没船からの視点」（第 37 回日本貿易陶磁研究集会,於立教大学,2016 年）（招待講演）

〔図書〕（計　9　件）
①『中近世陶磁器の考古学』第 10 巻（著者：佐々木達夫,山本文子,長佐古真也,櫻庭美咲,坂井隆ほか,雄山閣, 2019 年：分担執筆（櫻庭美咲）,範囲：「神聖ローマ帝国諸侯の磁器陳列室にみる政治性と日本の表象―ブランデンブルク＝プロイセンおよびザクセンの事例を中心に―」pp. 253-379.）（共著）

②『異文化を伝えた人々 19 世紀在外日本コレクション研究の現在』（著者：日高薫,櫻庭美咲,フィリップ・スホメル,ブルーノ・J・ヒツフェルト,澤田和人ほか,国立歴史民俗博物館編, 臨川書店, 2019 年:分担執筆（櫻庭美咲）,範囲：「神聖ローマ帝国諸侯の磁器陳列室―シーボルト・コレクションとの関連をふまえて―」pp. 43-60,英訳, pp. 237-253.）（査読付）

③『17 世紀オランダ美術と〈アジア〉』（著者：幸福輝,櫻庭美咲,青野純子,タイス・ウェストテイン,尾崎彰宏,日高薫,シー・チンフェイ,深谷訓子ほか,中央公論美術出版 2018 年：分担執筆（櫻庭美咲）,範囲：「オラニエ＝ナッソウ家の磁器収集と陳列の諸相」pp. 75-91.）

④大橋康二『中近世陶磁器の考古学』第 9 巻（著者：佐々木達夫,小林仁,森村健一,大橋康二,渡辺芳郎ほか,雄山閣, 2018 年：分担執筆（大橋康二）,範囲：「中国磁器の影響で作られた肥前磁器の赤壁賦文鉢」pp. 227-245.）

⑤『中近世陶磁器の考古学』第 8 巻（著者：佐々木達夫,水上和則,陳殿,片山まび,野上建紀,木村淳,伊野近富,尾野善裕ほか,雄山閣, 2018 年：分担執筆（野上建紀）,範囲：「磁器の流通と消費のグローバル化」pp. 85-102.）

⑥『アジア・太平洋海域における有田焼交易ネットワークの考古学的研究』（著者：野上建紀,西岡総合印刷株式会社,2017 年）（単著）

⑦『伊万里焼の生産流通史―近世肥前磁器における考古学的研究』（著者：野上建紀,中央公論美術出版,2017 年,総ページ数 649）（単著）

⑧『亀井明徳氏追悼・貿易陶磁研究等論文集』（著者：大橋康二,佐々木達夫,高島裕之,山本文子,渡辺芳郎ほか,亀井明徳さん追悼文集刊行会編,亀井明徳さん追悼文集刊行会,2016 年,分担執筆（大橋康二）,範囲：「柿右衛門様式後の柿右衛門窯系色絵磁器の推定試案」pp. 86-96.）

⑨『中近世陶磁器の考古学』第 3 巻（共著者：佐々木達夫,新島奈津子,弦本美菜子,赤松和佳,佐伯純也,能芝勉,小林克,野上建紀ほか,雄山閣, 2016 年：分担執筆（野上建紀）,範囲：「ラテンアメリカに流通した肥前磁器」, pp. 291-304.）

［その他］（計　2　件）
①西田宏子「頑張る日本女性陶磁研究者 櫻庭美咲さん・藤原友子さん ―ドレスデンにおける国際シンポジウムから―」『陶説』No.788　2018 年 11 月号, pp. 54-57.

②櫻庭美咲「シーボルト・コレクションの陶磁」『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』国立歴史民俗博物館編,青幻舎,2016 年, pp. 168-169.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）
該当せず

○取得状況（計　0　件）
該当せず

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：荒川正明

ローマ字氏名：ARAKAWA, Masaaki

所属研究機関名：学習院大学

部局名：文学部

職名：教授
研究者番号（8 桁）：70392884

研究分担者氏名：野上建紀

ローマ字氏名：NOGAMI, Tatenori

所属研究機関名：長崎大学

部局名：多文化社会学部

職名：教授
研究者番号（8 桁）：60722030

(2)研究協力者
研究協力者氏名：大橋康二
ローマ字氏名：OHASHI Koji

研究協力者氏名：西田宏子
ローマ字氏名：NISHIDA Hiroko

研究協力者氏名：藤原友子
ローマ字氏名：FUJIWARA Tomoko